

---

# アマガミ の見つけた景色

アンリ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

アマガミ の見つけた景色

### 【Nコード】

N0339Q

### 【作者名】

アンリ

### 【あらすじ】

アマガミの世界にオリキャラが登場！

しかも今度は2人同時！

オリキャラ2人が掻き回すアマガミというラブロマンス…良かったら立ち読み感覚でお読みください！

これは『アマガミ の作る結末』の続編となります。

またアマガミの世界観を崩すような物も出てきますので、嫌気が差しそうな方は御遠慮ください。

## 第1話（前書き）

プロローグです。

## 第1話

「はっ…はっ…はっ…」

階段を駆け上がるスピードが段々と落ちていく。

もはや抱えているパンですらスピードを落とす一因となっていた。

僕は息切れを起こしながらも、両手でしっかりと抱えることだけは止めない。

食堂や購買に行こうとしているであろう生徒の波をかいくぐって教室へと向かう。

…ちょっと間に合わないかも。

スピードを落とさずコーナーへと入っていく。

ドンっ！

「わっ！」「キャッ！」

順調に階段の角を急いで曲がろうとしたところで、急に走って出てきた女子と正面からぶつかってしまった。

流石の衝撃に持っていたパンは1つ残らず地面へと叩きつけられる。

「ちょっと、気をつけてよね！藍坂！」

「ごめん…山崎さん…」

僕とぶつかるとも倒れることが無かった山崎さんは、廊下にペタリと座り込む僕を見下しながら先へと急いでいく。

山崎さんが怪我をしていないことにホッと一息吐いてから、廊下に散らばったパンを拾い集める。

周りの人の通行を邪魔しないように拾い集めると、すぐさま早歩きで角を曲がる。

急がないと……………

ようやくクラスのある4階へと辿り着く…ちょっと手間取っちゃった。

ガラガラ…

「はい、アウト〜！2分13秒オーバーだな。」

「今日は藍坂の奢りだな！」

「はぁ…はぁ…うん…うん…ごめん…」

買ってきたパンを机の上に並べる。

カレーパン、アンパン、ホットドック3個、卵サンド、チョコパン2個、ハンバーガー4個…

机の上には店でも広げられそうな程のパンが所狭しと置かれていく。

「あれ〜？俺が頼んだツナサンドがないぞ？」

「えっ…」

「本当じゃ〜ん。遅いし間違えるとかどんだけだよ〜！」

「しかも何個か潰れてんじゃねーかよ！これを食わせる気だったのか？」

「ご…ごめん！急いでいたら人にぶつかっちゃって…その時に僕の不注意で落としちゃったから」

「しかも落としてたのかよ！…ああ〜ったく、今日はこれで我慢してやるから、謝ってね〜で早く買ってこいよ〜。」

「う…うん。ごめん、ちょっと待っててね。」

「3分で帰ってこいよ、藍坂。」

「うん、頑張る。」

財布を握りしめ、再び多くの人で賑わう購買へと向かう。

…もう売れ残りが無かったら平野君怒るだろうな…

タッタッタツ…

始業式が終わり、早1ヶ月が経過している5月の平凡な木曜日…

そんな平日の午後には…僕はいつもの通りの…学校生活を送っていた。

4月上旬、僕は3 - Aと書かれたプレートが貼られた教室へと入っていった。

今日が3年生になって初の登校日…新1年生を迎える入学式に出席するために、2、3年生全員が登校してくる日だ。クラスの中を見渡すと顔見知りか何人かいて、去年同じクラスだった平野君や山崎さんの姿も見えた。

僕は黒板に貼られた座席表を見て自分の席に座る。

廊下側の一番前の席…登校初日は大抵出席番号順に座るので、小学生の頃から決まって一番前の席に座っている。

『藍坂 映』…名前が『あ』から始まる上に、次の文字が『い』なのだ。

よって今まで一度も出席番号1番じゃなかったことがない。

…心底どうでもいい事なんだけど…

「ようっ、藍坂。」

席に座り机に突っ伏していると自分の名前を呼ぶ声がする…この声は深沢君…だったと思う。

深沢君も同じクラスみたいだ。

僕は体を起こして声のした方向を見る。

そこには入学式だというのに柄物のTシャツを着て、その上からYシャツとブレザーを羽織っている。

どちらもボタンが閉められていない。

「どうしたの？」

「いや、今年もよろしく頼むな！って言いに来ただけだよ。」

「うん。また一年間よろしく。」

「おいおい！そんな冷たい態度取るなよ！親友だろ？」

「別に冷たい態度なんて…」

そんなつもり全くないのに…

「それじゃあさ、早速だけどひとつ走りしてジュース買ってきてくんね？」

そういつて右手に握られていた百円玉を僕の机の上に置いた。

「別に良いけど…もうすぐホームルーム始まるよ?」

「大丈夫だって。あと3分あるだろ?走ればギリ間に合うから。」

「それじゃあ飲む時間無いけど…」

「いいから早く行ってこいつっの!おらっ!」ガタッ!

「…それじゃあ行ってくるね。」

押し倒されるように立たされたので、とりあえず向かうことにしよう。

「おう。ミルクティーだからな。」

いつからだろう…小学生高学年になった頃にはこんな生活が始まっていた。

キツカケなんて覚えていない。

いつの間にかクラスの悪ガキと言われる男の子のランドセルを持って登下校するようになっていた。

そしてそれを強要する男子生徒が1人、また1人と増えていった。

それからは毎年同じ。

何かを頼まれては1人でやらされ、それで1日を終える。

そんな毎日だった。

「うん。じゃあ急いで…」

「ちよつといいかな、藍坂君、深沢君？」

さあ駆け出そう、といったところで急に真後ろから声を掛けられる。

僕も深沢君も声のした方向へと振り向いた。

「もうすぐ先生も来ると思うし、あまり廊下に出ない方がいいと思うの。」

そこには絹のようにサラサラと光沢のある黒い長髪、透き通るように白い肌、そして目鼻立ちの整った美人と言えるであろう女の子がこちらを向いて立っていた。

「えっ…」

「それに深沢君が飲みたいのなら、深沢君が行くべきでしょ？」

「あ…絢辻さん…。そ、そうだね！俺が間違っていたよ！」

「あっ…気にしないでいいよ。僕別に買ってきても…」

「よくよく考えたらそんなに喉乾いてなかったんだ！それじゃあまたな、藍坂、絢辻さん！」 タツタツタツ…

あやつじ？さんが深沢君に話しかけるとすぐさま自分の席へと戻っていった。

…買いに行かなくて良いのかな？

「えっと…藍坂君…でいいんだよね？」

「あつ、うん。藍坂映です。よろしくお願いします。」

深々と頭を下げ、自己紹介を行う。

「…クスツ。私は<sup>あやしつつかさ</sup>絢辻司です。こちらこそよろしくお願いします。」

そんな僕の挨拶に合わせるように、絢辻さんも頭を深々と下げながら挨拶を行った。

「藍坂君、ちょっといい？」

「なに？絢辻さん？」

再度確認を取ってから、絢辻さんはゆっくりと話を紡ぐ。

「ちゃんと自分で断らなきゃダメ。こういう時は強気に言わないと、深沢君の方もそういう風に藍坂君を認識しちゃうでしょ？」

「そついう風？」

「そつね…頼み事を無償で聞いてくれる人…かな。」

頼み事を無償で聞いてくれる人…確かに間違いじゃないかも。

「いいんだよ。僕そんなに忙しくなかったし。」

きっと絢辻さんは僕がパシリにされている、と言いたいのだろう。

「そんな…」

「心配しないで。嫌だったらちゃんと断るから。」

僕はもう一度絢辻さんにぺこりと頭を下げて、一度は立った自分の席へと再び腰を落とす。

せつかく空いた3分間を有意義にすべく、机に突っ伏して眠りにふけることにした。

背中からため息のような音が聞こえた後、椅子を引く音が聞こえた。

絢辻さんが諦めて座った音だろう。

小学生の頃からパシリに遭ってきたのだ。

庇ってくれる女の子…たまには男の子はいた。

しかし長く続いたことはない。

それどころか最終的にはパシリにする人もいた。

それ自体は別に構わないんだけど。

ガラガラ「はい、席について！ホームルーム始めるわよ！」

ざわついていたクラスが、慌てて席に座る音を立ててから一斉に静

かになる。

僕も顔を上げなきゃ。

お昼休みは混雑している屋上も、放課後になれば人気は少なくなる。

それはそうだ、暇なら家に帰れば良いのだし、暇をつぶすなら町にでも繰り出した方がよっぽど退屈しないだろう。

そんな屋上で僕は1人お弁当を食べていた。

おにぎりが2つと昨日の晩ご飯の残り物の総菜。

横に置いていた黒の小さい水筒を手にとって、冷たい緑茶を一杯飲み干す。

30分くらいゆっくりと時間を掛けて食べ終わると、手を合わせてからお弁当箱を鞆の中へと仕舞った。

そしてお弁当箱の代わりに取り出すのは銀色の塊。

これがわざわざ屋上まで来た目的だ。

周りに人がいなくなったことを確認して、東側にそびえる輝日東山にレンズを向ける。

覗き込むと手前には普段から馴染みのある町並みが続き、奥には一般の人にはあまり馴染みのない山並みが居座る。

少し角度を上げて赤く染まる空の色を画面の中に侵食させていく。

フレーム外から人の声が聞こえる。

ほぼ真下から聞こえるので、きっと校庭で部活をする人達や下校中の人達のものだろう。

少し聞き覚えのある声が聞こえたが、今はファインダー越しに映る景色から目を離さない。

まだ……まだシャッターは押さない。

手すりに肘を置いたまま5分は時間が経過した。

今だに僕の指は右上のボタンを押さずに止まっている。

…

……

…

「ふう…」

一息を吐き、ようやくカメラから目を離す。

カメラを片手でぶらぶら下げながら、手すりに片肘をかける僕。

今日も一日が平凡に終わろうとしている。

後方へとどんどん下がっていく夕日に対し、輝日東山の奥はどんどんと黒が上空に向けて浸食している。

そういえばと下方をちらりと見やると、思った通りの光景が存在していた。

ハードルを走って越えていく男子生徒、砂場に向けて大ジャンプを敢行する女子生徒、ようは陸上部が練習していたらしい。

カメラをケースの中にしまいつつ、何気なしに校庭を見下ろしていた。

うーん…いまいち違うな…

「こんにちは。こんな時間に何してるの？」

「えっ？」

急に後方から透き通った声が聞こえてきた。

誰もいないと思っていた屋上からは聞こえるはずのない他人の声が

…まあ誰かが夢中になっている間に来たただけだろうけど…これはま  
ずい…

「す、すいません！別に悪気があったわけじゃないんです！」

「きゃっ…」

僕は両手を後ろに隠しながら、すぐさま振り返り頭を下げた。

そう…カメラを持ってくるのは校則違反…だからこそ人目のない放  
課後の屋上を選んで楽しんでいたので。

それが人に見つかつたということは、カメラの没収、謹慎処分、停  
学…さまざまな事態が想定された。

「覗きとかをしていたわけではないんです！本当です！」

頭をなおいつそう深く下げる。

実際のところ腰の位置に持ってきていたカメラが、相手からしたら  
腰に乗っているように見えているのに全く気付くことはなく、ただ  
ただ頭を下げるのみだった。

「藍坂君、私よ。」

「えっ？…あつ、絢辻さん？」

恐る恐る頭を上げていく。

そこで眼に入つた者は、容姿端麗という言葉が本当によく似合つ学

級委員が軽く微笑んでいた。

「いきなり謝るからびっくりしちゃったわよ。」

微笑みを浮かべる絢辻さん。

そう…この笑みだ。

「ねえ、藍坂君は屋上で何してたの？」

「えっ…特に何も…」

「それじゃあカメラを持っている理由がないじゃない。別に先生に言ったりしないから大丈夫よ？」

…本当に何をしていたって訳じゃないんだけどな。

「…屋上からの風景を見てただけ。」

「そうなの…でもそれならどうしてカメラを…」

「カメラなら望遠も付いてるし、残したい時に便利だから…」

「残したい時？」

「なんて言うか…この場所から見て一番綺麗に見えた時…かな。」

鞆の中にカメラをしまう。

ちゃんとケースに入れておくのも忘れない。

「それじゃあ僕は帰るね。」

絢辻さんはまだ何か言いたそうだったが、それに気付きながらも無視するように横を通り抜ける。

勢いそのまま校舎内へと入り、階段を降りていく。

あまり絢辻さんと話をしていないと、また平野君達の逆鱗に触れかねない。

それに…なんだか絢辻さんって…苦手だ。

かくれんぼしてる時、鬼がこちらの居場所が分かっているのに何も言わないような…

それでも視線はずっとこちらを向いているような…

そんな気分…

とにかく家に帰ろう。

早くしないと晩御飯の支度が遅くなってしまう。

## 第1話（後書き）

漸く投稿することが出来ました！

就活やゼミやらの関係で投稿ペースが遅くなると思われますが、良かったら是非ご愛読お願いします！

## 第2話

「おーす、梅原。今日は珍しいな。」

「おっ…おーよ、巽…。はあ…はあ…」

俺はクリーナーに黒板消しを押し当てながら、勢い良く教室へと入ってきた男子生徒に片手をあげて挨拶する。

「今日は朝練だったか？たつぷりと絞られたみたいだな。」

「ま…まあな〜！俺ほどの才能人ともなれば、期待されるのは当然だつてばよ！」

「3年になったつてのに、未だに絞られるポジションにいるのはどうかと思うがな…」

確かにそうだな、と一つ納得して、梅原は駆け足で1人の女子生徒に駆け寄る。

そりゃそうだ、先ずはそこに行かなきゃ何も始まんない。

「遅れてゴメン！絢辻さん！」

勢い良く駆け寄った梅原は勢いそのままに頭を下げる。

それまで日誌を書いていた手を止め、長い黒髪をサラッと流しながら梅原の方へと体ごと向けた。

「ううん、朝練だったのなら仕方ないわよ。お疲れ様。」

「絢辻さん…本当に絢辻さんは優しいんだな！遅れた分はキツチり働くから！この漢、梅原に何なりと御命令を！」

ピシッと背筋を正し、まるで教官の命令を待つ兵士みたいだ。

「つかそろそろこっちに来るのも筋じゃないのか？」

「ありがとう。でも今朝やることは殆ど終わっているから大丈夫。」

そんなやけに熱い梅原を宥めるように絢辻さんはニコツと微笑む。

これがまた男子生徒を動かすことを分かってやっているのか…分かってないよな。

「えっ！？もう朝の仕事終わった！？…さすが絢辻さん…」

俺は教室に備え付けられている時計を見る。

確かに日直が来るべき時間から15分ほどしか遅刻していない。

「やっぱり絢辻さんはすげ…いや、凄いね。俺には1人で日誌から教室、廊下の掃き掃除、黒板まで終わらせるなんて…」

おい漢、梅原よ…今更ながら口調を気にしたってしょうがないだろ…

「ううん、私1人でやった訳じゃないわ。」

そういつて絢辻さんは指を指す。

「えっ？」

梅原が導かれるように指の先を目で追う。

やがてその先に立つ1人の生徒が…

「巽？」

「そう、巽君が手伝ってくれたの。」

そこで綺麗になった黒板消しを持った俺と梅原の目が合う。

「そういつこった。謝礼は随時募集中だからな、梅原。」

「……………熱でもあるのか？いや…もしや巽の皮を被った桜井さんとか……………」

「少しは信じる心を持ってや！あと梨穂子だからって人間丸々食えるわけないだろ！」

「いや、そこまでは言っていないぞ……………」

むっ…そう意味じゃなかったのか…後で口止めしておこう。

「本当にありがとう、巽君。おかげで助かっちゃった。」

「ああ、全然平気だよ。それに梅原なんかじゃ、時間通り着いたって何の役にも立たなかっただろうしな。」

「そんな事あるか！俺が来てればもつと早く終わってたってーの！」

「あつ…でも去年一緒に日直した時は窓から黒板消しを落として取りに行ってたよね。」

「なつ、絢辻さん覚えてたの!？」

「…なんでクリーナーあるのに使わねえんだよ。」

「その方が青春っぽいだろ！」

「知るか！」

んな力説されたって分からんもんは分からん！

てかこの会話去年もしたな…今思い出した。

「…とにかく、今日残りの仕事は俺がやるよ。放課後絢辻さんは先に帰っていいから。」

「ううん、どちらにしたって今日は残る予定だったから。」

「じゃあすぐにそっちに行ってくれて構わないから。こっちは俺に任せてくれよ。」

梅原も自分で漢、と言っくらいに実直な奴だ。

絢辻さんも困ったような表情を浮かべているが、きつと退くことはないだろう。

「…そうね。それなら甘えちゃおうかな？」

ついには絢辻さんが先に折れた。

強引に押し切りを決めた梅原は勢い良くガッツポーズを決める。

ちよこちよここと教室内の生徒数が増え始めるこの時間。

日直の仕事も終わり、後はチャイムがなるまでのんびりと…

「って俺には何もなしかよ！」

「ん？ああ、ありがとな、大将。」

「んな言葉を望んでんじゃねーよ！謝礼金とか金一封とか保険金の受取人の権利とか！」

「最後だけやたらあくどいな…」

「梅原…自殺だけはするなよ？」

「するか！あとお前には何も渡すもんはない！」

チツ…けちなやつだな。こつなつたら昼飯をかつさらつか…

「心の声が出てるぞ、巽。」

「巽君は相変わらずお昼が無いのね…」

絢辻さん…そんな餓死寸前の哀れな捨て犬を見るような目で見ない

で…

新学期が始まってすでに3日が過ぎている…いや、3日しか経っていない。

最高学年ともなるとやはり気分も違うもので、今のところ無遅刻無欠席を貫いていた。

勿論変わったのは気分だけじゃない。

教室が3階から4階へと移動したこと。

クラスの顔触れが変わったこと。

中高合わせて3年間同じクラスだった親友、橘純一と別のクラスになったこと。

そして4年間同じクラスにはならなかった梨穂子とは、更に一年記録を更新することとなった。

3年B組23番巽怜。

たつみりょう

思わず土手で叫びたくなる学年とクラスだが、担任教師は年配の男性教師…というわけはなく、むしろ美人の女性教師だ。

いやいや俺は恵まれてるな…なんて思うことは既に無い。

登校日初日からキツイお説教を頂いている身としては、あの鋭い目つきで睨まれたら蛙直しく、といった具合になる。

…ちょっと寝たくらいで『受験生としての自覚があるの！』なんて大声で起こさなくてもいいのに。

まあ…確かに受験生と言われる学年になったのは事実だ。

普通なら教科書を読み潰すほど理解をし、問題集の穴を何冊も埋める…くらいはしなければいけないのだろうが。

「まだ決まっちゃいないんだよな…」

俺は手が加えられていない進路調査の用紙を見下ろしながら深くため息をついた。

「どうしたの、巽君？なんか重いため息が洩れてるけど？」

ふと頭上から声をかけられて頭をゆっくりとあげる。

「ああ、伊藤さん。いや、こいつがね…」

そこにいたのは伊藤香苗さん。

ツンツンと跳ねた茶髪で細身の女の子…梨穂子の親友であり、その繋がりから顔見知り程度にはなっていた。

そんな彼女が気にかけるほど、俺はどんよりとした空気を醸し出していたのかもしれない。

伊藤さんは俺が先程から目を落としていた紙を見ると、ああ、なるほどね。とすぐに察してくれた。

これが梨穂子だったら、あれ、今日提出だけ？とか言ってくるんだろうな。

「確かに…進路の事は私も頭を抱えてるよ。まだ3年生になったばかりなのに、いきなり大人になれ、って言われたみたいだね。」

「まあ、そんな感じもするね。」

そう、ため息を吐くほど悩んでいたのは進路…

しかも俺の場合は他の人とは少し違う。

俺の場合、まずは進学か就職。

家庭の事情で金銭的に貧弱な異家では、高額な大学の授業料を払うことは困難だ。

ならば就職…という決定しても、自分が就きたい仕事とは何ぞや、と頭を抱えてしまう。

そうなるとうち大学じゃなくても専門学校に進学してから…なんて事も考え始めると最早終わりが見えなくなる。

あぁっ！と頭をガシガシと搔いていると肩をトントンと叩かれた。

「考え中の所悪いけど、巽君にお客さんだよ。」

「客？」

上半身を横に倒して、伊藤さんの体に隠れていたドア付近を見る。

「あぁ…ありがとう、伊藤さん。」

俺はヒューヒューというヤジを無視して前方のドアを目指した。

伊藤さんに向けてぺこりと頭を下げ、俺が来るのを待っている女の子。

七咲逢

華奢で顔立ちの整った…そしてまるで年上のように俺の世話を焼こうとする後輩。

小学生の頃のスイミングスクールからの知り合いで、七咲は今も水泳部として泳ぎを続けている。

顔立ちや姿勢から察するように真面目で規律をしっかりと遵守するタイプ。

上下関係に関してもしっかきりしていて、遭遇時、また去り際での挨拶を欠かさない（一部除く）。

「おつす、七咲。今日はどうしたんだ？」

「こんにちは、先輩。今日はお弁当持ってきましたか？」

「……………いや、持ってきてないな。朝めんどくさくなってるな。」

「…それは良かったです。実は今日は偶々お弁当を作りすぎてしま  
いまして、良かったら処分して頂けないでしょうか？」

「おう、ありがたく頂くな！」

こうして七咲は偶に金欠病の俺に手作り弁当を恵んでくれる。

偶々多く作ってしまった日限定…多いときには月に二桁に届くほど  
だが…こうしてわざわざクラスにまでやってくる。

そんな七咲と俺は彼氏彼女の関係…という訳ではない。

「かあ、また見せつけてくれるじゃねえか！とつとと屋上でも何  
処へでも行きやがれ！」

ドア付近の座席に座る梅原は今の光景を一部始終見ていたからだろ  
うか、俺が教室を出て行くタイミングで声を絞り上げて叫んできた  
が気にしない。

昨年度の3学期の間でその程度の事は慣れた。

一度クラスに来るのは控えて欲しい、とオブラートに包んで七咲に  
話したところ、堀から固めていくのは基本ですよ、とよく分からな

い返答を返されただけだったし…とにかく止めても変わらなそうなので、今はすんなり受諾する事に決めたのだ。

…つくづくクズだな、俺は。

捨てるのがこんなに難しいなんてな…。

だから選択肢を捨てる…とまでは言わないが、狭めかねない進路調査用紙を埋められないのかもしれないな。

暖かい春風吹く屋上で、七咲の弁当を食べながらそんな事…あと、作ってきた弁当は晩飯にすればいいか、と考えていた。

七咲と昼食を食べるときは決まって屋上で取る。

別にどちらかが決めたわけではないのだが、つい脚が屋上へと向けて進んでいくのだ。

…実は七咲に手綱を握られていて、上手く誘導されているのかもしれないな。

横並ぶ黒猫に目を向けても真実は分からなかった。

「先輩、一つ言伝が。」

色鮮やかな弁当にがつついていっていると、頬をほころばせていた七咲が何かを思い出したかのように話しかけてきた。

「ん？…ゴクツ…何の話だ？」

「昨日の夜塚原先輩から電話がありました、巽先輩に何か用があるらしいんです。」

「塚原先輩が？俺に？」

去年まで水泳部の主将兼七咲の姉御、といった雰囲気だった塚原先輩。

現在は親友森島はるか先輩と同じ大学に進み、キャンパスライフを謳歌しているだろう。

一房に纏められた黒髪がとても似合う綺麗な人だ。

「はい、それで空いてる日をお聞きしたかったみたいです。」

「へえ〜、話ね〜…とりあえず今日明日は空いてるな。」

「今日明日は私が空いてないからダメです。」

「何故に…というかなんで俺に直接電話してこないんだ？」

ポケットの膨らみをポンポンと叩きながらふと思った。

「番号をご存知ではなかったらしいですよ。」

「いや、はるか先輩なら教えたから知ってるぞ。」

「えっ…森島先輩もご存知なかったみたいなので、私に電話してきてたらしいんですけど…」

「あれ？おかしいな…それならなんで七咲から…ああそうか、人の電話番号を勝手におし」それで今日明日以外でいつが空いてますか？」…とりあえずはるか先輩に電話してから決めるわ。」

隣で睨んでくる黒猫を無視して、はるか先輩の携帯電話に連絡をする。

すると1コール目が鳴り終わる寸前に「もしもし〜ヒロ君？」という可愛らしい応答が返ってきた。

「お久しぶりです。突然何ですけど塚原先輩って近くにいますか？」

「も〜、ヒロ君！女の子を呼ぶのに他の女の子を使っちゃダメですよ〜！」

「…相変わらずですね。ちょっと塚原先輩に用があって…お願いします、はるか先輩！」

先輩を強調した一言に渋々ながらも携帯電話を手離し、近くにいただろ〜塚原先輩に渡してくれた。

遠くから「ヒロ君がひびきちゃんとお話したいって！」と拗ねたような声が聞こえた。

あとでちゃんと謝っておこう。

「もしもし、ごめんね、巽君。」

「いえいえ…それで何か御用があるみたいですけど…」

「うん、ちょっと巽君に相談があつてね。出来れば会って話したいんだけど、いつ空いてるかな？」

頼りがい溢れる塚原先輩に凄く申し訳無さそうに話されたら、いかに無理でも協力したくなるのは男として自然だろう。

俺は脊髄反射で「今日明日なら空いています。」と答えてしまった。

「そうなんだ。それなら急だけど今日の夕方でもいいかな？場所は駅前のファミレスとかで。」

「分かりました。授業が終わり次第行きますんで、すみませんがちょっと待っててください。」

「私から頼んだんだから。ゆっくり来てくれて構わないからね。」

それじゃあ、と一言いれてから電話を切る。

本当に久しぶりに塚原先輩と会う。

そんな事でこんなに気分が良くなるのは、塚原先輩が『面倒見がよくて、頼りがいのある年上の女性』だからだろう。

今は鼻歌でも歌いたくなる気分を抑えて、とりあえず横で「私不機嫌です。」と顔に書いている七咲をどうにかするの集中しよう。

## 第2話（後書き）

今回はもう1人の主人公、そして前作の主人公である巽怜の話でした。

呼んでない方のために…

前作

貧乏学生

家庭の事情で一人暮らし

主食はもやし

小学校の頃通っていたスイミングスクールでバイト中

橘さんと梨穂子さん、梅原とは小学校からの幼なじみ

七咲とはスイミングスクール時代知り合っていたが、中学は別

音楽中毒者な面もあり

柵町さんとは中学からの悪友

中多さんにはいまだ少し怯えられる

森島先輩にはヒロ君と渾名をつけられている

美也ちゃんにはタツツーと呼ばれている

絢辻さんは…あまり出ていませんでした

良かったらそつちも見てやってください。

### 第3話

「それじゃあ早速ですが、今年も学級委員を男女各一名ずつ決めたいと思います。まずは立候補してくれる人はいますか？」

壇上で高橋先生が静かな教室内を見渡す。

期待に満ちつつも、例年通り立候補はいないんだろう…と少し諦め混じりの視線が送られる。

先生がどんな生徒を受け持ってきたかは知らないが、わざわざ学級委員をしようとする生徒は極少数だ。

いてもクラスに1人。

結局は推薦へと話が進まざるを得ない。

普段はどんなに活気あふれるクラスでも、こういつ時に限り急激に静まり返る。

しかもわざわざ優等生ぶるように背筋を気持ちばかり正す生徒までいるくらいだ。

それほどまでにやりたくはない仕事なのだろう。

「先生。」

そんな静寂しきった教室に漸く1つ声が拳がる。

「誰もやりたい人がいないのなら私がやります。」

立ち上がって答えたその人は絢辻さん。

平野君達に聞いたところ、毎年毎年委員という活動全てに立候補し、それを完璧にこなすという才色兼備の人らしい。

またその事を鼻にかけるわけでもなく、控えめのお淑やかな性格。

そして一番に整った顔立ちにシルクのような黒髪が男子生徒の人気を集めているようだ。

話によると、森島先輩無き輝日東のアイドルは絢辻さんだとか…とにかく物凄い人気らしい。

クラス全体から盛大な拍手が鳴り響いた。

僕がボーっとしている間に、どうやら絢辻さんで決まったらしい。

「それじゃああとは男子から1人だけ…」

「先生。」

少しざわつき始めた教室内にまたも声が挙がる。

しかし…この声は深沢君。

僕はこの時点で何を言おうとしているのか感づいた。

「何、深沢君？もしかして立候補してくれるの？」

「いえ、俺よりもっと相応しい奴がいるんで、推薦したいんですけど。」

「推薦？」

「はい、その藍坂なんてどうですか？去年も学級委員やってますし。」

ほらね、思った通りだ。

「そうなの、藍坂君？」

「は…はい…」

確かに学級委員はやった。

それは間違いではない。

しかしそれも今回と同じ。

一年の頃から同じクラスだった深沢君が推薦、そして他にやる人がいないから決定。

このパターンで去年は殆どの委員会に所属したんだよね。

「藍坂は他にも色々やっていますし、いいと思うんですけど。」

「…藍坂君、推薦して貰ってるけど…」

高橋先生は少し渋い表情を浮かべている。

それはそうだ。

明らかに分かるほどの押し付け。

いや、イジメと言えるレベルなのかもしれない。

それを分かりつつも、先生として1人の生徒の意見も尊重しなくてはいけない。

先生だからといって好き勝手出来るわけではないのだ。

唯一突破口があるとすれば、僕自身の拒絶。

それさえすれば先生としても意見を聞きつつも、この押し付け行為を防げる。

…そんな心配無用なだけだね。

「…はい。僕が…学級委員を…」

「先生っ！」

ニヤニヤと笑みを浮かべる深沢君らを伺いながら、先生に了承の意を示そうとした所、教室の後ろの方から大きな音が発生した。

学級委員が決まりかけ、教室内が弛緩しきつた時の発言。

僕はその音に何故だか柔らかさを感じた。

それにより再び教室内が静まり返る。

「いきなり大声出してどうしたの、巽君？」

「男子の学級委員、俺がやっちゃダメですか？」

「えっ……」

「藍坂君もやってもいいみたいですが、俺はどうしてもやりたいです。みんなは俺じゃダメですか？」

どう？と辺りを伺うと、またもパラパラと拍手が湧き上がった。

突然の立候補宣言。

それに付いていけないのは、何も僕だけではなかったらしい。

そんな混迷極める中、たつみ君はそれに乗じて表を集めるように辺りを見渡して「どう？」と伺っている。

たった2文字、それだけでみんなは拍手を強制されているかのよう  
に拍手し始める。

いや、強制はしてないんだけど、何だか視線と語尾がやたら強いので  
そう感じるだけだ。

いつの間にかクラス全体からの支持を受け巽君。

「……はい、それじゃあ巽君、よろしくね！」

その様子に高橋先生も何故だか満足そうだ。

…まあ僕がやるよりは良心が痛まないんだろう。

「任せてくださいよ！俺がまとめ上げて見せますから！」

「絢辻さんが、の間違いだろ〜！」

クラス中でドツと笑いがこみ上げる。

巽君ってよく知らないけど、きっと前のクラスでもムードメーカーみたいな役割だったのかも。

「うるせー、梅原！事実だって言わなきゃバレないだろ！」

「…はあ…やっぱり巽君じゃダメかも…」

こうして学級委員は巽怜君と絢辻詞さんに決まった。

それに不満を持つのは平野君や深沢君。

自分達の思い通りいかなくてイライラしているのだろう。

…あとで呼び出されたりするんだろうな。

僕は学級委員にならなかった事に安堵しつつも、深い深いため息を吐くこととなった。

「怜、どうして柄にもないことやってんのよ？」

「俺みたいなのトップに相応しい男が学級委員やらなかったら、それはもう罪だろ？」

「確かにこのクラスで貧困の部でトップでしょうね。しかも圧倒的に。」

「いやいや、第2位の棚町さん家にそろそろ抜かれるんじゃないか、ってヒヤヒヤしてますよ。ねえ、薫さん？」

その売り言葉に買い言葉の応酬がどんどんと激しくなっていく。

最終的に怒鳴りあいになつた所で、梅原君や恵子さんが2人を抑えつけていた。

実際に名前が分からないので、やたら親しげな呼び方になるが仕方ない。

巽君が「梅原、止めるんじゃないか！」と…

棚町さんが「コイツ一発殴るだけだから止めないで、けいこ！」と

言っていたのをクラスの端っこの席で聞いていただけ。

しかも机に突っ伏したまま。

だから巽君以外顔すら分からない。

まあわざわざ顔を見るほど気にはしていない。

だってこの掛け合いは自然だ。

大きく威圧的な声にもどことなく優しさ……いや信頼感かな？が隠されている気がする。

後ろからガタツと椅子を引く音が聞こえた。

きっと絢辻さんが立ち上がって止めに行ったのだろう。

事実2人を宥めている絢辻さんの声も聞こえた。

そうして漸く少しばかり静かになった教室。

また後ろから椅子を引く音がする。

これはきっと絢辻さんが席に戻った音だろう。

一時間目の準備でもしているのだろうか、鞆を開けて何かをしている音がした。

まだ5分以上は休み時間があるのに真面目なんだなあ、と内心考える。

そこでトントンと肩をたたかれた。

意識をとばすでもなく、ただ目を瞑っていた僕はそれを合図にパツと起き上がる。

目を押しつぶすように頭を腕枕に乗せていたため、急に視界が開けてもぼやけてしか見えない。

それでも席の横に誰かが立っているのは分かったので、とりあえずそちらを向いておこう。

「おい、ちよつと顔貸せよ。」

どうやら平野君だったらしい。

平野君は了承を聞くこともなく、僕の左腕を引っ張って軽々と教室の外へと連れ出した。

歩幅の差で平野君に付いていくことも一苦労だが、そんな事も言っ  
てられない。

僕は懸命に短い足をパタパタと動かして付いていく。

連れて行かれた所は3年生の教室がある階の男子トイレ。

引っ張り込まれると同時に出口とは反対側の壁に叩きつけられた。

ボールでも投げるかのように叩きつけられたので、背中を強打し鈍い痛みが身体中を駆け巡った。

それを合図に今日の憂さ晴らしが始まる。

先ずはお腹に一発アッパー気味のフックがめり込む。

体格差が20cmほどある平野君からの一撃は一瞬僕の体を宙に浮かすほどの威力で、たまらず僕は咳き込みながら膝を曲げてしまう。

次に首もとのワイシャツを持ち上げるようにして、無理矢理立たせてから左肩に一発拳を振り落とす。

比較的痛みが少なく、声すら上げなかった僕に苛ついたのか、平野君は再びお腹に強烈なフックを決めた。

やはり膝を曲げてしまう僕に、平野君は上から何かを話している。

怒鳴り散らすと言うわけでもなく、諭すように落ち着いた声で。

ここで痛みを逸らされていて聞いていなかった、なんて言ったらもう一度殴られるのは体験済みなので、とにかく分からないけれど謝っておこう。

咳き込みながら丁寧に紡いだ謝罪を聞くと平野君は満足したのか、蹴りやすいポイントにある左肩付近に蹴りを入れて後ろへと下がった。

左からの強い衝撃を受け、右側の壁に顔で受け身をする羽目となった。

その後深沢君がついでとばかりに太腿に蹴りを入れて、2人して早

々にトイレから去っていった。

犯行時間わずか3分。

始めた頃とは違い、ドンドンと手早くなってるのは慣れてきたからだろうか。

また今では騒ぎとして認知されないように、大声さえ出さずに行くようになった。

前に騒ぎに駆けつけた先生がいたからそれもしくはがなく自然な成り行きだ。

一応、とばかりにトイレの前に1人…今回は深沢君が先生が駆けつけてこないかどうか見張る徹底ぶり。

そして勿論騒ぎにならないように、露出している部分、ようは顔や掌などには傷跡を残さない。

見た目からして虐められっこの僕が顔に青胆なんて作ってたら、誰だって気がついてしまうだろう。

いや、クラスの全員がこの行いに気付いているかもしれないが、それをわざわざ聞いてくる人も…勿論助けようとする人もいない。

現に僕がボコボコにされている間トイレに入ってくる生徒はいない。

みんなこの光景を見てすぐさま退散してしまうから。

まあ面倒ごとにはわざわざ首を突っ込むのもナンセンスだしね。

僕は乱れた呼吸を深い深呼吸を何回かする事で整え、制服についた汚れを払い落とす。

そこでようやくトイレに僕以外の人が入ってきた。

きっと僕を見て何かあったと察しているだろうが、勿論話しかけてこない。

いや、もしかしたらすぐさま体裁を整えた事で本当に気付いていないのかも。

僕は高校生活でこれだけは成長しているスキルだと思っている。

トイレの奥の方で無意味に立ち止まっている僕の方をチラリと伺っただけだった男子生徒も、すでに興味を無くしているようだ。

用を足し手を洗う男子生徒の隣の蛇口を捻って、同じように手を洗う。

別段意味はないが、トイレに来たのなら手を洗って出て行くのがマナーだろう。

こんな意味のないことの所為で、僕の日常は少しずつ変わっていつてしまうなんて考えてもいなかった。

「顔…どうしたんですか？」

突如横から声をかけられる。

しかし僕は何故だか真っ直ぐ正面を見上げた。

そこには1枚の大きな鏡…その中には僕とこちらを見ている男子生徒の1人。

そこで僕は2つのことに気がついた。

1つは僕の顔が右半分だけ赤くなっていること。

けして顔など殴られたりしていないのになんで…

「それに…背中も少し汚れてますよ？」

ふと僕の背中側を見下ろした彼が、ポンポンと背中を優しく払う。

どうやら僕が見えていない場所は案外汚れていたようだ。

まあ僕が気付いた事の2つ目はそんな事ではなく…

「もしかして…虐められてるのか？」

僕の外見から一つの答えを導き出し、急に雰囲気の変わった彼は…

眉をつり上げて刺々しく話しかける彼は…

僕のクラスの学級委員になっただばかりの人だった。

### 第3話（後書き）

自分の中学は毎年だれも立候補しませんでした。

でも大学で友達とかに聞いてみると、学級委員の毎年学級委員の取り合いになった中学もあるとか…

やる気のない生徒しかいなかった中学だったんですね！

## 第4話（前書き）

まだまだ4月は終わらないです。

## 第4話

「あれ、珍しいね、怜?」

いつものように俺に起こされた純一が何やら珍しい物を見たかのような声を出した。

視線を辿るとテーブルの端に置かれた銀の弁当箱があった。

「ん?俺が弁当作るのがそんな意外か?」

そんなはずはない。

今でこそ減り気味だが、高校1年の時はほぼ毎日のように作っていたし、弁当を食べている様子を純一は見ているはずだ。

「いや、そうじゃなくて…」

どうやらそういうことではないらしい。

しかし視線の先には弁当箱しかなかった。

いったい純一は何が言いたいのか…

「雨の日は弁当作らないんじゃないの?」

「…なんじゃそのローカルルール。」

そんな事決めた覚えはないぞ。

「だって雨降ってるよ、『雨かよ…だり…』って言って何にも  
しなくなるでしょ？だから七咲にお弁当作ってもらってるのかと思  
ってたよ。」

俺の口調を真似しようとして全身をだらけさせる。

それがまた重苦しく陰湿な声だったので、朝から苛々してしまう。

「今の気だるそうな喋り方は後で制裁を加えるとして…そんな習性  
みたいに決まってるわけ無いだろ！雨降った日だって…」

「つい最近あった？」

…えっと、前に雨降ったのは先週の金曜日だから…

「…作ってない。」

「でしょ！怜は単純な奴だからね！」

…だから七咲はピンポイントに弁当が無い日に持ってきてくれたた  
のか…

…だから七咲の弁当を食べるのは雨の日が多いのか…

ということは今も…

「やばいな…」

その俗説を信じるなら、七咲は今日お弁当を作ってくれているはず

だ。

いつもなら何事もなかったかのように頂くのだが、今日からはそうもいかない。

「…とにかく学校着いたら七咲に謝りにいこう。」

「？別に七咲と一緒に食べればいいじゃないか？」

「色々と事情があるんだよ。純一は梨穂子と桃色空間を形成してる。」

「別に桃色空間なんて…だって梨穂子とだぞ？」

不服そうに睨んでくるが、そんなもの聞き入れるわけがない。

「部長と副部長がイチャイチャしてっから新入生も気を使って幽霊になったんだよ。」

「そんなこと！…ないと思う…」

一度は勢い良く否定しようとしたが、尻すぼみとなってしまつのは思い当たる節があるのだろう。

というか実妹からの一言を思い出したんだろう。

「せっかく『梨穂子の茶道部がピンチなんだ！頼む！』って言われ  
たから美也ちゃんや中多さんが入ってくれたってのに…」

お返しとばかりに勢い良く且つバカっぽく純一の真似をしてやる。

少し大声を出してしまったので、斜め向かいの席に座り箸を持ちながらこっくりこっくり船をこいでいる美也ちゃんが飛び起きてしまった。

「ははっ…」

「苦笑い浮かべてんじゃね〜っつ〜の。」

現在梨穂子が部長を務める（努めるでもある）茶道部は一時廃部のピンチに陥っていた。

理由は部員数不足。

夕月先輩、飛羽先輩という個性が溢れすぎて頭の片隅にこびり付く先輩達が卒業してから、2人の幽霊部員含めてギリギリ成り立っていた茶道部の部員数は3人となってしまったのだ。

そこに純一が加わっても4人。

部活として成立させるための5人には及んでいなかった。

そこで純一は空気も読まず俺を誘いやがった。

一度腹を割って全てを話したってのに、わざわざ離れていく俺を呼び止めたのだ。

だけど俺も一度決めたことだ。

素直に頷くことはせず、後輩の美也ちゃんと中多さんをまんま肉ま

んで釣って退避。

そして6人へと増員に成功し、今に至る。

いや、本当はその後新入生が1人入ったみたいだが、美也ちゃんが可愛がりすぎて1ヶ月程で姿を眩ましたらしい。

まあ俺には関係ない…事だよな？

とにかく今は七咲に会いに行かなければ。

俺は空になった食器を流しに持って行き、叔母さんに感謝の意を伝えてから橘兄妹より一足お先に学校へと向かった。

話は新学年が始まってから数日後まで戻る。

俺は七咲経由で塚原先輩に相談を持ち掛けられた。

内容は聞いていないが、あの真面目な塚原先輩からの頼みだ。

きつととても重要なことなのだろう。

放課後になると、俺は足早に待ち合わせ場所であるファミレスに向かう。

店に入るとウェイトレスが寄ってきたので、辺りを伺いながら「待ち合わせしてるんですけど…」と言っておいた。

首を必死に伸ばして探すこと数秒、すぐさま「おい！ヒロくん！」と手を振り大声で呼んでいるはるか先輩と辺りを気にしつつも小さく手を振ってくれた塚原先輩を見つけた。

「お久しぶりです。はるか先輩、塚原先輩。」

2人の座るテーブルまで行き一礼。

それから自分の座る席の隣の席をポンポンと叩いているはるか先輩に従って、はるか先輩の隣、塚原先輩の斜め向かいに座ることにした。

こういう場でははるか先輩を立てないと、すぐさま拗ねてしまうので従順に。

「久しぶりね、ヒロ君！お姉さんに会えなくて寂しくしてた？」

「そ…そうですね。」

（従順に従順に…）

つい本音を言いそうになったが、それでは話が進まない。

出かけた言葉をぐつと抑えて、話を合わせておく。

てかはるか先輩…塚原先輩に目配せされたので今は黙っておこつと。

「相変わらずお元気ですね、はるか先輩。大学生活はどうですか？」

「うん…今のところヒロ君みたいな子はいないかな…」

「反応に困る返答ですね…そういえば俺はるか先輩に電話番号教えてましたよね？」

「あれ？はるか知らない、って言ってたけど…」

「おろっ？私ヒロ君の知ってるよ？」

「ん？」

なんだかよくわからない事になった。

3人とも頭を傾げて表情を伺っている。

「えつと…はるか先輩は知ってて、塚原先輩は知らないと聞いた…んですよね？塚原先輩はどうやって訊ねたんですか？」

「私ははるかに、巽君の電話番号知ってる？って…」

「それではるか先輩はどう答えたんですか？」

「むむむ…知らない。私巽君の電話番号は知らない。」

…

「ちょっとアドレス帳見てもいいですか？」

うん！と満面の笑みを浮かべながら、簡単に渡してくれたはるか先輩の携帯を調べる。

そこには予想通り…

「ヒロ君…って俺の本名じゃないんですけど…」

俺のアドレスは夕行ではなく八行に存在した。

「えっ？違ってたっけ？」

「…流石はるか先輩…大学生になっても、おかわりなく…」

「はるかは相変わらずだから。」

苦笑いを浮かべる2人にはるか先輩は頭を傾げるも、目の前に置かれたチョコレートパフェを頬張り満面の笑みを浮かべる。

「それで塚原先輩、用事って…」

「ああ、ごめんね。実は巽君のバイト先のことなんだけど。」

頭を抱えていた塚原先輩はパツと姿勢を正し、こちらに目尻がつり上がった優しい目を向けて話す。

「バイト先って…ウチのプールがどうかしましたか？」

「そこって今バイトの募集とかしてないかな？」

「バイト希望ですか？してるっちゃしてますけど…」

俺ははっきりとした答えを返せないでいた。

「けど？」

当然塚原先輩もそこを聞いてくる。

「基本的にバイト募集の紙とかって、夏休み入る直前とかにならないと張り出さないんですね。なんで今いるバイトやコーチの知り合いから引つ張ってくるぐらいしかしてないです。」

なんでも、わざわざ募集しなくても集まるくらい人望があるからな！だそうだ。

その所為で毎年人数不足になってるのを忘れてるんだろうか。

出されたお冷やを口に含む。

「それなら巽君を呼んでちょうど良かった。」

「？」

「実は私もバイトしたくって巽君を呼んだんだ。」

少し申し訳無さそうに苦笑しながら、塚原先輩は本題を切り出した。

「おい、一緒に飯食おうぜ。」

4時間目終了のチャイムが鳴り響く。

教師がちらりと腕時計を見やった後、1つ声をかけられた。

それは授業終わりの号令。

今日に限り学級委員以外に日直という役職が付いた俺は、それをしっかりと受け取り号令をかけた。

それを言い終わると同時に俺はクラス前方に向けて歩いていく。

先生も未だクラスにいる状況でのスタートダッシュ。

誰もついてこない。

そう、話しかけている相手すら。

「お〜い、藍坂〜！」

二度目の呼びかけ。

今度は少しざわつき始めた周りの声にかき消されないように、少しばかり大声で。

そこでもようやく目的の人物は振り向いてくれた。

「えっ…僕…？」

「ウチのクラスに藍坂は1人しかいないだろ？」

「そう…だね。」

お〜お〜、すげーパニックってるな〜。

おどおどした態度と声で、殆ど話したことのない藍坂の様子がよくわかった。

「藍坂は飯持ってきてんの？俺は弁当なんだけどさ。」

「僕は…購買にでも…」「よし、それじゃあ購買行くぞー！はい、立た立った！」「…うん。」

藍坂は辺りを気にするように、焦点をあちらこちらに飛ばしてからゆっくりと立ち上がった。

立ち上がったと同時に肩を組んで並んで廊下へと出ていく。

藍坂の身体は小さく、170ちょいしかない俺でも肩を組むのは厳しかった。

それでも無理やりもたれ掛かるように肩を組んで、強引に引っ張っていく。

藍坂の身体は大きさに比例しているように軽く、やろつと思えば簡単に振り回せるだろう。

力加減に注意しながら購買部へと向かっていこう。

…後ろから何やら舌打ちのようなものが聞こえたのは、気のせいだと思っことにした。

「ようやく昼飯だな〜！藍坂は何食べるんだ？」

購買部までの道中、何も喋らない訳にもいかないので世間話を選択。

「うん…余ってるのがあればそれでいいかな。何があるか分からないから…」

「購買部使ったことないのか！？珍しいな〜…俺なんか2週に1回くらいは使ってるのに。」

「そうなんだ…」

「つまり藍坂は普段弁当持ってきてるのか？」

「うん…。…いつもは簡単におにぎりとか…そういつの作って持ってきてる…」

「…なんだか凄く共感出来そうだ…」

「…どうしたの？」

「いや、何でもない。とりあえず今日はおかずやるから元気出せ！」

「そんな…悪いよ…」

なんか目頭が熱くなっちゃった。

頭を傾げて不思議そうに見てくるが、目尻を押さえることを止められない。

そっか…藍坂も苦労してんだなあ…

「いいから、いいから！よっしゃ、購買部はすぐそこだ！駆け足で  
ゴー！」

「わっ…た…巽君!？」

人混みが出来つつある購買部へと飛び込んでいく。

今日は藍坂の為にがんばっちゃろっじゃないか。



#### 第4話（後書き）

就活で忙しくなるから頻繁に書けないと思っていましたけど…

それって電車での移動時間が増えるから、むしろ執筆時間がふえてんじゃない！？

ということに気付いた選考直前の一時。

なので今後もちよくちよくとアップできると思います。

…遅れたらすみません！

あと良かったら感想お願いします！

第5話（前書き）

放課後 藍坂verです

## 第5話

夕焼けが滲む帰り道、僕は1人帰り道を歩く。

街並は桜の花びらによって染められていたものから、一気に緑色の風景へと変わっていた。

公園からは子供たちの元気な遊び声。

タッチした、してない！と口論をしているところからみると、どうやらあの子たちは鬼ごっこでもしているのだろう。

公園の外から眺めている僕にも詳細まで聞こえてくるので、それはもう大きな声でどなりあいになっている。

子供たちは鬼ごっここのタッチしたかどうかなんて些細なことで大げんかにまで達しかけている…それは僕自身は体験したことのない出来事。

子供のころ…いや今でも僕はあんなに真剣に遊べるだろうか。

幼稚園か小学校入りたてのころか…昔は僕もあの子たちのように公園で友達と遊んだことがある。

鬼ごっこ、かくれんぼ、缶けり…今思えば毎日のように何かしら遊んでいた気がする。

その時は真剣に鬼から逃げ、真剣に隠れ、真剣に缶を蹴飛ばしていたかもしれない。

ただ友達との遊びもあるきっかけを機に少しずつ減っていった。

理由は単純…親の転勤による転校。

埼玉のほうに住んでいた僕は静岡へ…

さらにまた2年後神奈川へ…

こうして数回の引越しを経て、僕の周りの状況は少しずつ変わっていった。

まず両親が短い滞在期間の中で、その土地その土地で習い事を頻繁に通わせるようになったこと。

そして…引越しを重ねることでリセットされる交友関係に嫌気がさしてきたこと。

この二つのことから…友達とその友達との時間をなくしていった。

クラスの端っこで呆けて過ごす日々…それに目をつけたのは毎回の如くいじめっ子。

最初は泣き喚いた。

共働きの両親が帰ってくるなり、すがりつくように。

涙をこぼし、近所中に聞こえるくらいわんわんと。

しかし…両親の生活リズムは全く変わらず、その2カ月後に再び転

校することとなった。

高校から歩いて30分という距離をようやく終え、生まれてから何軒目かという我が家に入る。

高校生になってから一度も転勤していないので、この春ようやく3年目へと達した…僕にとっては長い付き合いの家。

テーブルに置かれた白のメモ帳。

帰ってきて最初にすることはこれをチェックすること。

これが両親との数少ない連絡手段。

何か伝えたい事は書いておく。

別に取り決めがあった…という訳ではないけども、いつからかこんな形でしか両親の言葉を受け取りづらいものになってしまった。

今日は…『これで何か食べるときなさい』

メモ帳には一枚お札が挟まっている。

帰りが遅くなるから先に食べておけ、ということだろう。

何を感じるといふこともなく、財布にしまつとひとまず部屋へと向かう。

物が殆ど置かれてなく、生活感を感じさせない部屋だと自分でも思う。

また部屋が綺麗すぎるのもそれに拍車をかけていた。

しわ一つ無いベッドシーツ。

埃も溜まっていない部屋の隅々。

家で何もすることがない時、掃除ばかりしていることが明らかに悪影響になっていた。

制服をハンガーにかけ、ジーンズにTシャツ、その上から深緑コート。

春、秋は基本的にこんな格好しかしていない。

いつものスタイルに着替えると、学校指定の鞆を持ち再び外へ出ていく。

今日はやることがあるのだが、偶には外でやるのもいいだろう。

それにご飯も外で済ませるのだ。

今から出てるのも悪くないと思う。

しっかりと鍵を閉め、駅前の方へと向かう。

坂を下っていくと、市街地から商店街へと景色が変わってきた。

それに合わせるように、香りも香ばしいパンや大判焼きの甘い香りに変わっていった。

「梅原、さつきから僕が出したアイテムを取ってかないでよ！」

「へっ！世の中弱肉強食…ってアー！？」

ふとゲームセンターを覗くと、同じ輝日東高校の制服を着ている生徒がいた。

2人でギヤーギヤー言いながら、仲良く並んでゲームをしている。

そういえばゲームセンターって入ったことがない。

友達と遊ぶことがなくなってからか、こういった娯楽施設に縁がなくなっていた。

といつてもすぐに入ろう、という行動に移ったりせず、そのまま素通りする。

そして向かった場所はファミレス。

平日ということであまり混雑はしていない。

1人だということをウェイトレスに告げ、2人用の席へと案内される。

席に着くととりあえずメニューを開いて、彩りに富んだ料理の数々をぼんやりと眺めた。

ファミレスには同じような理由で何度も来ているのだが、いつまでたってもメニューを素早く決められない。

目移りしてしまう…という訳でもなく、ただ単に全部のメニューをカロリーまでしっかりと見てから決めるためである。

カロリーを気にするのはこのガリガリの身体をどうにかしたいから…なんてことはなく、単なる好奇心だ。

20分は見えていただろうか。

呼び出しボタンを押して、一言謝りながら結局はいつもと同じハーブティーがセットで付いたパンケーキを頼んだ。

癖のある髪を束ねたウェイトレスが注文を復唱し、深々と頭を下げて下がっていった。

店員さんがいなくなったのを合図に、鞆の中からプリントとノートを数冊、それに筆箱を取り出した。

狭い机の上に所狭しと置かれていく勉強道具。

これは明日までの宿題である数学のプリントだ。

試験前の時期とかなら大抵の人は見たことあるだろうが、ファミレスで長時間居座って勉強するあれだ。

かなりお店の人にとっては邪魔な存在だろうが、平日のこの時間は比較的混雑しないことを何度か足を運んだことで学んだので、夕食時まではお邪魔しようと考えていた。

辺りは店員さんの声や親子連れの声、食器と食器のぶつかる音、メロディアスなBGMと集中するには不適な場所だが、まあ直に慣れていく。

意識的にプリントに書かれてある三次関数に目を落としていった。

「お待たせしました。パンケーキとハーブティーのセットです。」

と集中しようとしたタイミングで、ウェイトレスがパンケーキを運んできた。

「あ…ありがとうございます。」

広げて置かれたノートを整理して、空いたスペースに置いてもらう。

その瞬間ハーブのすっきりした香りが鼻腔を刺激した。

その香りに負けたかのように、ふらふらと手を伸ばして暖かいカップを掴み、息を吹きかけ少し冷ましてから一口含む。

…うん、別段美味しいという訳じゃない。

「あの〜。」

「?…ど、どうかしましたか？」

ふと正面を見やると、先程パンケーキを持ってきてくれたウェイトレスがこちらの様子を窺っている。

何か悪いことでも…って宿題しようとしてたっけ。

「藍坂…君よね？私は同じクラスの棚町薫…なんだけど…」

「えっ…棚町さん？」

特に注意されるでもなく、いきなり言われた一言はとても予想出来るものではなかった。

「やっぱりそうだったんだ。一人で勉強？」

「あっ…うん。明日までの宿題があるから、それを…」

「えっ!? そんなのあったっけ!？」

「うん。授業終わりにこれを配ってたでしょ？」

ピラッと指でつまみ上げたプリントが翻る。

「あれ…そんなのあったかなあ…」

最初頭を傾げるだけでピンときていなかった棚町さんだったが、ふと何かに気付くと顔を真っ青にした。

「やばっ…店長が睨んでる…教えてくれてありがとね、藍坂君。あとでコーヒーくらいサービスしてあげるから。」

そう口約束を告げて棚町さんはカウンター奥へと去っていった。

今日初めて話したばかりだと言うのに凄く親しげに話し、きびすを返した棚町に不思議な印象を受ける。

たったこれだけの事でお礼をしようとする人に今まで会ったことないからだろうか。

「…コーヒー嫌いなんだけどな。」

再びプリントに目を落とす。

そしてファミレスに入ってから30分、ようやく僕は宿題の1問目に取りかかった。

「宿題は順調？」

ファミレスに居座ること2時間、棚町さんからサービスしてもらったコーヒーに対し悪戦苦闘していると、先程とは違い学生服姿の棚

町さんが席に向かってきた。

「あ…うん。終わってゆっくりしてるところ。」

すでに鞆の中には積まれていたノートが入っている。

「え…そんな時間かかるの…」

バイト終わりで疲れているだろう棚町さんががっくりと肩を落とすた。

「そんなこと…ないよ。教科書に書いてある公式に当てはめればいいから。」

「それが簡単に出来れば苦労してないわよ…ああ…今日は寝るの遅くなっちゃうわね…」

クラスではあまり見ない元気のない棚町さん。

そんなに数学が嫌いなのだろうか？

「そうだ…あとプリント探さなくちゃいけないんだ…たわね…」

「プリント…持って帰ってないの？」

「まだ鞆の中見てないけど…正直入れた気がしないのよ…」

今日配られた宿題だ。

鞆の中に無いのなら、家の中を探してもきつと見つからないだろう。

つまりなかったら宿題を忘れることにもなりかねない。

「…それならこのプリント持って帰っていいよ。」

そういつていまだにテーブルの上に置かれていたプリントをそつと手渡す。

「えっ…いいの!？」

「うっ…うん。僕もう終わったし…問題もノートに写したから。」

証拠とばかりに鞆から一冊のノートを取り出し、宿題を書いたペー  
ジを開く。

そこには回答式の他に、細く薄い線でグラフや問題文が書かれてい  
る。

「うわぁ…藍坂君つてもしかなくてもガリ勉タイプ?」

「そんなことないよ…ただ棚町さんがもしプリント持ってなかった  
ら…って考えたらこうしたほうがいいのかあ…」

とぎれとぎれに自分の考えを述べる僕。

その際どうしても小声になってしまつのは僕がダメなやつだからだ  
ろっ。

「えっ…これってわざわざ私の為にやってくれたの!?!こんな面倒  
くさいこと!?!」

「特に面倒なことなんて…ただ問題をまる写ししただけだから…」

「…でも私がプリント持ってたかもしれないじゃない。」

「？それなら柵さんは宿題できるんだから大丈夫でしょ？」

柵さんの質問の意図が分からず、足りない頭を必死に振り絞って出た答え。

それを聞いて柵さんは啞然としてしまった。

「ごめん…迷惑だったかな…」

「あつ…うつん、そんなことないわよ。ありがとね、藍坂君。」

よかった…柵さんは満足してくれたみたいだ。

「それじゃ僕はそろそろ帰るね。」

学校指定のカバンと伝票を持って立ち上がる。

そして柵さんに一言告げて、横を通り過ぎて行った。

「ちょっと！もしかして藍坂君は私にこれを渡す為に今までいたの？」

そこで柵さんが再び話しかけてきたので、振り返って正面を向いてから答える。

無論視線はファミレスの床に向いていた。

「うん…そうだけど…ちゃんと渡せたし、そろそろ帰らないと…」

特に家で何かをするわけではないが、高校生があまり夜遅くまで出歩くのはおかしいだろう。

現に時計の針はもうすぐ7時になろうとしていた。

「ごめんね。一応解き方のコツも僕なりにだけど書いてみたから、よかったら参考にして。…それじゃあ。」

今度こそレジに向かって歩き始めた。

会計時柵町さんからサービスで出してもらったコーヒーの分も出そうかと考えたが、それはそれでややこしい問題になってしまいかねないのであえて黙っておこう。

からんからん…とドアを押すと軽快な音がした。

もうすぐ4月も終わる。

それでもまだまだ春は続いて行くんだろう。

その証拠に桜の花弁は散ってしまったけど、時より吹く風にやわらかな春の香りを感じる。

もう日は完全に落ちているけど春の陽気を感じる。

…明日も頑張ろうっと。



## 第5話（後書き）

最近筆が進まないです…

もうすぐテスト期間に入るので少し更新が止まると思います…

しばしお待ちを！

よろしかったら感想お聞かせくださいm( ) ( ) m

## 第6話（前書き）

巽サイドの話です。

気づいていた方もいらっしやると思いますが、藍坂、巽サイドを交互に投稿しています。

## 第6話

「おゝす、七咲！」

「…おはようございます。」

「今日はいい天気だな〜！絶好の昼寝日よりだな〜！」

「そんなことないと思います。」

「そっか〜？こんなぼかした陽気で眠くならない方が難しいだろ？」

「先輩みたいに誘惑に弱い方ならそうかもしれないね。」

「いやいや、これは人間の心理みたいなもので…普通なるもんだから。」

「私がそうならないのには、きっと何か理由があるんでしょうね。例えば…凄く怒ってるとか。」

「遅れてすみませんでした〜！」

1人の男の叫び声がある丘の上公園に木霊した。

時刻は13時を数分過ぎた頃、俺は見事七咲との待ち合わせ時間に遅刻してやってきた。

「あまりにも暖かいから…春が悪いんだ〜！」

「桜好きな先輩の発言とは…いえ、確かに春が悪いですね。」

「うっ…その含みを持たせた発言はなんなんだよ…」

「いえ、深い意味はありませんので。」

やばいな…結構本気で怒ってる。

その証拠に視線がかなり冷ややかだ。

もう凍りつくんじゃないかと心配するくらい絶対零度の視線。

もう春真っ盛りなのにこの場所だけ真冬のように寒かった。

「…まあこの話は置いて…七咲は飯食ったか？」

「いえ、先輩がいらしてから食べようと約束していましたから食べていません。」

…そうでしたね。

でもそんな感情籠もってないように喋らないでほしいな…：ハート  
ブレイクしちまうよ。

「そうだったそうだった！それじゃあ早速食べに「ちなみに今日は私がお弁当を作ってくるので、公園で食べる…んですよね？」…もちろん今からあそこの芝生まで行くっか、って言おうとしたところだ。」

その完璧な笑顔もやめてほしいな…

やっぱりあの日七咲は弁当を作ってくれていた。

朝のホームルーム前に確認しに行った時は朝練のためか会うことは出来なかったが、1時間目と2時間目の間の僅かな休み時間を使って告げた。

弁当はこれから毎日作ると…

これから七咲と飯食えないと…

それだけを告げた後、七咲は何を思ったかは分からない。

ただすぐに『そうですか』と一言答えただけ。

理由も言わず、そんなことを言う俺に対して。

肩を落として落ち込む…とまではいかないまでも、何かしらガツカリされるだろうと思っていたので少し肩透かしをくらった気分だった。

つい逆に俺から休日の予定を聞きにいつてしまったほどだ。

そして現在に至る。

日曜の昼時、家でご飯を食べてきて元気一杯になった子供達がサッカーをしているすぐ隣の芝生で七咲お手製弁当を食べている。

ようやく七咲の機嫌が直ってきたところだ。

それでもすぐに急転直下しかねないので注意は忘れない。

…というか七咲って本当に感情を表に出しやすくなってきたな。

高校生になって再び再開した時は明るい面も見せていたけど、ここ  
まで喜怒哀楽がコロコロと変わる女の子じゃなかった気がする。

…というか凄く女の子らしくなった。

今日の私服だつてそうだけど、胸の中心部に十字架の模様が入った  
黒の長袖カットソー、真っ赤なペチスカート。

そして黒のニーソックスときたもんだ。

正直服装に意識を向けた時、滅茶苦茶ドキドキした。

七咲もそれを誉めると、顔を真っ赤にしながらも喜んでくれて、そ  
れで機嫌を直してくれたんだよな。

「それで今日はどこに行くんですか？」

「ああ…今日はどこにも行かないでいいかな…って思ってるんだけ  
ど…」

少し気まずそうな声になってしまった。

これじゃあ七咲のご機嫌取りをしているみたいじゃないか。

「…？」

「ずっとこの芝生の上。」

「…まあたまにはいいかもしれませんね。」

「だろ？それに…ほら。」

俺は持ってきた鞆の中身を全てシートの上に出す。

「えっと…お菓子に水筒です…ね。」

「ゆっくり喋るだけの準備はしてきたからさ。新学年になってから  
のことも話そうか。」

今年の1〜3月は会う度その日の出来事を話していたが、七咲と昼  
飯を食べなくなってからそういう機会も減ってしまった。

だからたまに大量に話してブランクを埋めようかと考えたのだ。

ついでに遅れた理由もこれの準備に手間取ったから。

熱いお茶を2L水筒満杯まで容れるのが結構時間かかったんだよな  
。

「新学年になってから…」

対して七咲はあまり浮かない表情を浮かべている。

眉間にしわを寄せて顎に握り拳を当てて…まるで『正座ver考える人』だな。

「どうした？」

「いえ、これといって話すことが…」

ああ、そんなことで悩んでたのか。

新学年になって嫌なことばっかなのかと思ったわ。

「俺は結構あるんだけどな。例えば塚原先輩がスイミングスクールでバイトし始めたのは教えてたろ？」

「はい。」

ファミレスで待ち合わせした後すぐに紹介しにいったら一発採用だった。

履歴書すら持ってきてないのに…と塚原先輩は戸惑っていたのを見られたのが収穫かな。

「それからな、何回か一緒に入った時、塚原先輩が俺にお礼がしたい、って言ってきたんだ。」

「まあ…一応先輩が紹介しているのでおかしくはないかと。」

「それでも特に欲しいものなんて無かったから断っただけど、塚原先輩意外と食い下がってきてさ。そしたらバイト中雑談してた時の事思い出したみたいで…」

「塚原先輩まで不真面目な方にしないでください。」

「辛辣だな…とにかくそれでそれから週2でウチに来てもらってんだ。」

…ん？なんかおかしいな。

なんか言葉足らずだったような…

「…先輩？」

あれ、なんか七咲が物凄い満面の笑みを浮かべてるぞ？

あつ…急に立ち上がってどうしたんだ？

スカートなのに今立ち上がったら中が見え…

「えいつ！」

「…っ！？」

そんなことを全く気にせず、七咲は見事なローキックを放った…俺の腰めがけて。

鋭い痛みが体中を駆け巡り、つい顔を歪めてしまつ。

「イッタク…何すんだよ…七咲さん？」

「こつち見ないください。変態がうつります。」

「俺は空気感染するウィルスかなんかかよ…」

「いえ、それより質が悪いですよ。」

あらら…なんだか七咲さんもの凄く不機嫌になってらっしゃる。

…別に悪いことはしてないんだけどな…

「それじゃあ散らかってますけど。」

赤褐色のドアを開くと見慣れた自分の部屋が広がっている。

いつもなら1人寂しく男が住まう部屋なのだが、今日に限っては別だ。

「おっじゃまします！」「お邪魔します。」

俺の後に玄関に入ってくる2つの影。

明るく元気一杯な声の主がはるか先輩。

その声に遅れてはつきりと語句を紡いでいるような声は塚原先輩だ。今日は俺と塚原先輩共にバイトがなく、かつはるか先輩が暇な日。ようやく出来たそんな日に、塚原先輩によるお礼を受け取ることになった。

お客さんが来たということで、急いでおもてなしの用意。

塚原先輩は気にしないで、と言っていたがそういう訳にもいかないだろう。

バイト先からくすねておいたお茶葉を使って少し温い緑茶を出す。

「ふうん、ヒロ君の部屋ってこんななんだ。弟たちとはちょっと違うかな。」

なんかやたらキョロキョロ辺りを見渡して…気になったものは直に手にとって見ている。

別に見られて困るものなんて純一の部屋ほどないので特に止めはない。

「それじゃあ早速お願いしていいですか？」

「うん、そのために来たんだもんね。」

出された粗茶を姿勢正しくゆっくり味わうように飲む塚原先輩はそう答えた。

…てか凄く様になつてたな。

とにかく了承をいただいた俺は学校指定の鞆からドサツと教材を出した。

「それじゃあ苦手つて言つてた英語からでいい？」

「はい。」

塚原先輩とバイト先での話でつい進路迷っている事を話してしまつた。

別に隠すつもりもなかつた訳だけど、それでも話してしまったのはあまりにも塚原先輩が頼りやすかつたからだろう。

…だって仕事は一を聞いて十を知るつて感じだし、すでに子供達から懐かれている。

そろそろ俺の威厳が危つい気がする程だ。

そんな塚原先輩に相談してみると、素晴らしいアイデアをくれた。

『迷っているなら両方に備えればいいんじゃないかな？』

…さすが推薦で国立大に行くお方だ。

という訳で塚原先輩にお礼として家庭教師をしてもらえることとなった。

ただかバイト先を紹介しただけなのに、こんなにしてもらえるな

んで感謝してもしきれない。

だから塚原先輩に教わってる今現在、俺の心は泣いて喜んでるんだよな…去年の水泳部はきつと軍隊だったんだろっ。

「とまあ話を纏めるとこんな感じかな。」

「…」

あれ、今度は最初からちゃんと説明したのに結局機嫌悪そうだぞ？

「それなら森島先輩がいらっしやっただ理由は…」

「それは…はるか先輩曰わく『ヒロ君がひびきちゃんを襲わないように…』って。」

断じてそんなこと思ってないからな！マジで！

「…はあ、分かりました。ちなみに次はいつ家庭教師のバイトするんですか？」

「え〜つと…次は火曜の夕方かな。」

「分かりました。その日は私も空いているので、私も参加させていただきますか？」

「えっ？」

「…よろしいですよ？ 巽先輩？」

…いや、だから黒いオーラを纏わせて笑うなって。

「まあいいんじゃないね。七咲だって塚原先輩とはるか先輩に会いたいだろ？」

七咲なら…もんだいないな？

「はい、ありがとうございます。」

「いや、別にいいけど…それより七咲は何か話したいこと、聞きたいことないのか？」

満足そうにしているところ悪いけど、俺ばかり話してたら不公平じゃね？という意味不明な理屈から、七咲に再び催促する。

「えっ？そうですね…聞きたいことと言えば…」

「よっしゃ、どんといいー！」

「先輩は今日作ってきた玉子焼きといつものどちらが好みですか？」

「…はい？」

なんとも真剣な面持ちで聞いてきたのは料理の味付け。

別に俺と七咲は師匠と弟子の関係じゃないよな？

「どっちですか？」

「えっと…今日の方が好き…かな。」

「分かりました。ありがとうございます。」

小さくガッツポーズしながら、とても嬉しそうに微笑む。

それが凄く幸せそうに見えて、つい俺から訊ねてしまった。

「訳…聞かなくていいのか？」

今日という場を設けた本当の訳…七咲と弁当を食べなくなった理由を言う場を作りたかったから。

俺の勝手な理由で七咲を傷付けてしまったのではないかと思ったのだが…七咲はあえて聞こうとしてこなかった。

だからつい俺から訊ねてしまった。

七咲に全て話して謝りたい…けど止めるわけにはいかないと言っために。

「…先輩は聞かれないんですか？」

「えっ？」

「私は先輩の事を学校一知っているとってます。だから先輩の行動原理なんて簡単に把握出来ませよ。」

七咲は苦笑しながら答えた。

姿勢をピンと整え、正座している脚を微塵も崩さず…

全てを信じ切っているような目をしながら…

…俺って七咲にこんな信頼されてたんだな。

「俺は…」

何をしたかったんだろう。

七咲にしようがないと思わせたかったのか？

いや…自分にしようがないと思わせたかったんじゃないのか？

そんな心、七咲は簡単に読みきっていたんだな。

「いや、まだ大丈夫だ。」

そこまで言われちゃ簡単に逃げられつかよ。

こっちだって男の意地があるんだ。

「七咲…ありがとな。」

とりあえず礼はしておかないと。

シートに座りっぱなしだが、深々と頭を下げる。

正直嬉しかったから。

ここまで信用してくれていることが。

俺という人物を理解してくれていることが。

「先輩。」

そんな少し感極まっている俺を、七咲は優しく呼びかける。

「私…先輩のこと誰よりも好きですから。」

顔を真っ赤にして放たれたその一言は…

俺の身体の奥底へと融けていった。

「おっはよ〜、藍坂〜！」

教室に入るとすぐさま朝の挨拶を、教室の一番右前に座る藍坂にする。

「…」

あれ、返事がない。

やり始めた当初はこんな感じで反応がなかったが、最近ではぼそぼそしながら返してくれてたのに…

「藍坂〜おはようさん。」

それでも俺はしつこく話しかける。

ただ単に聞こえてなかっただけかもしれないし、今まで突っ伏していた藍坂が夢の世界から帰ってくるのに時間がかかったのかも…

「巽君。」

あっ良かった…一応起きて…

「もう話しかけないでほしいんだ。」

「…えっ？」

「巽君に付きまといわれて迷惑だから…僕に話しかけないで。」

急に辺りが静かになった。

いや、耳に何も伝わってこない。

「どうせ巽君も僕が哀れだから付き合ってるんでしょ？」

そんな無音の空間でただ藍坂の声だけが響き渡る。

…冷たく、普段よりはつきりとした口調のそのセリフが、その言葉の本気度を表していた。

## 第6話（後書き）

七咲さんはきつと盲信的な考えをする方だと私は思っています。

異論は認める！！

ちなみに主人公は桜が好きなのではなく、『桜』って漢字が好きと  
いうか…伝わってくれると助かります。

感想お待ちしています！！一言だけでも…

## 第7話（前書き）

藍坂君の下校風景？

## 第7話

夕闇に染まる帰り道、僕は久々に1人で下校している。

いつもなら帰り道が違うにも関わらず隣に付いて来る巽君が色々話をしてくれるのだが、今日は委員会があるとかで先に帰っている。

ちなみに帰り道が違うのなら気を使わなくていいよ、とも言ったのだが、バイト先がこっちにあるんだ、と気を使われた。

巽君は僕よりも身長が高く、スポーツも出来て話の話題を豊富に持っている人だ。

僕からなんて殆ど話しかけないのに、食事中や帰り道の会話に困ったことがない。

本当に僕より断然優れている人だと思う。

そんな巽君がいないからか、今日の帰り道はゆっくりと辺りをじっくり見渡しながら歩いていた。

今日も公園の中から子供達の元気な声が聞こえてくる。

あの中にも僕みたいな人生を過ごす子がいるのかなあ…と何となく感慨に耽ったりしてみたものの、そんな人めったにいないか、と自己完結した。

…なんか今日の帰り道は味気ないかも。

「おい。」

そんなことを考えていると、不意に後ろから声をかけられた。

ゆっくりとした歩みを止めて振り返るとそこにはクラスメートが2人。

「平野君に深澤君…」

たしか帰り道が真逆である2人が何故かいた。

…ううん、理由もなんとなく分かっている。

「…どうしたの？」

「お前さ〜最近調子のってない？」

「そんなこと…」

暖かくそよぐ春風にも負けそうなかすれた声が発せられた。

「いや、のってるね。巽の野郎がいるからって、俺達を怖くないとでも思ってるんじゃないか？」

「それは…」

この質問はズルい。

『はい』なら怖くない、って意味になるし、『いいえ』って言うても…

「ううん…そんなことないよ。」

「それは異がなくても怖くない、って意味か？なめやがって。」

平野君達の都合の良い捉え方をされてしまう。

後は何を言っても無駄だ。

あまり人目のつかない路地裏に連れて行かれ、これまた目立ちにくい所を狙って痣を作っていく。

10数分後には路地裏に落ちていた空き缶のようにボコボコにされ、蹴り飛ばされ…無様に倒れ伏せることとなった。

久しぶりのリンチということもあり、2人はニタニタと顔が崩れるのも辞さないでいつもよりほんの少し強めに痛めつけてきた。

「おい、藍坂。」

そんなこと気にもとめず、平野君は見下しながら吐き捨てるように言葉を発した。

「お前から巽に言ってやれ。『二度と近付くんじゃねえ』ってな。」

「ゴホッ！…うん。」

「いいか？俺らの事も絶対言うんじゃねえぞ？巽は別に恐くねえが、絢辻さんには知られたくねえからな。」

「うん…ゴホツ！…わかった。」

無理やり言わせるように口からでた言葉に満足し、平野君達は路地裏から姿を消した。

これが巽君に別れを告げた前日の出来事。

存外単純でただ巽君を傷付けた結果となった僕達の終わりだった。

本当は巽君に謝りたいところだけど、それでは平野君達に迷惑かけてしまう。

少し心に引っかかりを覚えたが、こういったものをため込むのも僕の役割なんだろう。

そして僕は2日連続で1人下校する。

巽君とは…朝話して以来一度も顔を合わせてない。

巽君はホームルームが始まるまで何度も訳を訊ねてきた。

訳とはもちろん『近付くな』と言った理由。

僕はそれを全て無視し、机に突っ伏して全てが僕の前からいなくなるのを待つ。

結果巽君はそれ以降何も話してこなくなる。

これで良かった…と僕は素直に思う。

巽君は学級委員を務め、持ち前の明るい性格で平野君達を除く殆どの人が好意的に思っているだろう。

それに対し僕は真逆…たどたどしくしか話すことが出来ず、周りの邪魔にならないように流され忘れられていく。

そんな2人が一緒にいたって、一方的にマイナスを負荷しているようなものだ。

…これで良かったんだよ。

僕は1人帰り道を歩く。

一昨日までは確かに存在した左側を意識しながら。

遠くの空ではいかにも雨雲のような厚い雲が、輝日東に向かってゆつくりと近付いてきていた。

今日は夕方頃から雨が降る予報なので、早く帰らなきゃと1人呟く。

しかし僕はふと見慣れた帰り道にある一つのお店に目が止まってしまった。

「ゲームセンター…」

そういえばこの前入ってみようかな、って思ってから結局行かずじまいだったことに気付く。

自動ドアが開く度にけたたましい音が押し出されるように町へと流れる。

正直こういったつるさい場所は苦手なのだが、何故か分からないが自然と足がゲームセンターへと進んでいく。

もしかしたら寂しさを紛らわしたいという思いがあったのかもしれないが、それは誰にも分からない。

そして僕は人生初ゲームセンターに足を踏み入れた。

微妙に薄暗い店内に、外からでも聞こえてくるけたたましいゲーム音。

そこには遠目からは見ていたものの、いざ近付いてみると1つ1つの機械の大きさに圧倒されてしまう。

入ってすぐ左にあるのが… UFOキャッチャー。

正面には… モニター付きの1人用ゲーム機。

ゲームをプレイしている人の後ろから覗き見してみたが、どうやらゲーム機一台一台違うゲームが入っていて、お金を入れたらそのゲームをクリアするかゲームオーバーになるまで出来るみたいだ。

他にも卵の殻みたいなものに入ってやるゲームややメダルを入れて遊ぶゲームもあった。

「…なにしているか分からないや。」

しかしそのどれもが僕にとっては異質な物で、唯一出来そうであったシューティングゲームも空くのを待っている人もいるみたいだと

でも初めての僕が並んでもいいような雰囲気ではなかった。

「…帰ろう。」

仕方ないので何もゲームをすることなく、そしてたぶん二度と入ることはないだろうと思いつながらゲームセンターから立ち去ろうと出口へ向かった。

「あつ！？ちよつと待てよ！！」

「えっ？」

自動ドアの前へ一歩踏みだそうとしたその時、急に後ろから大声で呼ばれたので出かけた足を踏み止め、声のした方向に振り向く。

するとグレーのニット帽を被った、僕よりも30cmは大きいのではないかと思われる男の人がこちらにタツクルるように走ってきていた。

「てめえ！待ちやがれ！」

その男性の後ろから先程も聞こえた怒鳴り声が再び聞こえる。

…どうやらさっきのは僕に対してじゃなかったらしい。

それはそうだろう…わざわざ僕を呼び止める人なんて平野君達を除けばいないんだから。

そんなことより今はここから退かないといけない。

たぶん今走ってこっちに向かっている人は出口を目指していて、その出口との直線上にいる僕はきつと邪魔だろうから。

僕は鈍いながらも必死に道を空けるように横に一步ずれる。

「なっ!？」

しかし鈍い反射神経が災いして、僕がいつまでたっても退かないのを見て一步横にずれた男の人と見事にまたも直線上に被ってしまった。

直前でまたもぶつかってしまっコースになったことでニット帽の人は驚きの声を上げる。

そして僕はまたしても人の邪魔をしてしまった。

勢い良くぶつかられた僕はその勢いを殺せず、突然飛び込んだことよって反応しなかった自動ドアに頭からぶつかる。

対する男の人はなんとか転ばず踏みとどまったようで、自動ドアがようやく反応して開くと同時に僕を跨ぐようにしてゲームセンターの外へと走っていった。

舌打ちをして走っていった男の人を見て本当に申し訳ない気持ちで一杯になる。

「...どうして僕はこうなんだろう。」

誰も答えてくれる訳のない独り言を呟きながら、倒れていた体をゆっくりと起こす。

その時僕はお腹の上に何か黒いものが乗っていることに気付いた。

「…財布？」

ひよいと持ち上げて見てみると、それはどうやら二つ折りになった財布のように見えた。

きつとさつきぶつかった人が落としてしまったのだろう。

早く渡しに行かなきゃ…と思うのだが、倒れた体はあまりにもゆっくりと立ち上がったため男の人の姿は全く見えなくなっていた。

「これ…交番に届ければいいのか？」

「すみません！ありがとうございます！」

財布を見つめ、これはゲームセンターに預けるべきなのか交番まで持って行くべきか迷っていると急に頭上から感謝の言葉が降ってきた。

何事かと思い上を向くと、そこには先程走り去った男の人に向かって叫んでいた学生服を着た…ってあれ？

「うめ…はら君？」

「見ず知らずの他人のために体を張って…って藍坂？」

「さっきはマジでサンキューな！これは礼だ〜受け取れ〜！」

「あり…がとう。」

「いってことよ！財布が捕られなかったことを考えたらジュースの一本くらい！グイッといっしてくれ！」

「うん…頂きます。」

僕は梅原君に奢ってもらった桃の缶ジュースのプルトップを開け、味わうよつに一口含む。

「いや〜藍坂もゲーセン行くだな〜！もしかしたら会ったことあったか？」

「ううん。…僕今日初めてゲームセンターに行ったから。」

「へえ〜…今時そんな奴がいるとは…なんだかせつかくのゲーセンデビューを邪魔して悪かったな。」

「ううん。ちょうど帰ろうとした所で、偶々ぶつかっただけだから。」

公園のベンチに2人並んで座り、どちらもどちらを気を使いながら話す。

ゲームセンターで梅原君の財布を偶然取り返した僕は、一通り梅原君から礼を受けた後『ここじゃ話しにくいから公園行こうぜ!』と静かな場所へと連れて行かれ、こうして梅原君の奢りでジュースを飲んでいる。

夕焼けの差す公園に偶々子供達は殆どおらず、ゆっくり話したがっていた梅原君には好都合だろう。

僕はというと本当に狙ってやった行為ではないので、お礼すら受け取る気は無かったのだが、『結果はどうあれ取り返したのは藍坂だろ!』と言われ、それ以上は何も言えなくなり今も申し訳ない気持ち一杯で隣に座っていた。

「藍坂は最近異と仲良いよな?あいつ面白いだろ?」

「あつ…うん…」

昨日まではとても楽しかった。

「いや〜異ってマジですごいやつでな。俺達と同年なのにもうバイトして1人暮らしして…正直俺なんか全然大したことないように思えてくんだよな。」

「…僕も…それ分かる。」

「だよな〜!しかもあいつそれをおくびにも出さないんだぜ!?!」

「…そうなんだ。」

きつと僕には出来ない。

誰かに守ってもらえるのを待って、ダメなら人生を恨むだけの毎日を過ごすようになる。

「しかも後輩の可愛い女の子にまで好かれてるんだぜ!? せめてそこだけは勝たせてほしかったぞ、神様〜!」

「巽君、彼女いたんだ…!」

「あゝ… 本人は否定してるけど、2年の頃は週に2回以上は彼女の手作り弁当食ってたんだ。く〜っ! 言ってるまた腹立ってきた〜!」

「…そうなんだ。」

…だったらやっぱり良かったんだよ。

僕がいなくなったら彼女さんとの時間も取れるし…

「ああ… でもつい最近はそのうちになかったな。」

「それは… 僕と一緒に昼食べてたから。」

僕が邪魔をしていたんだ。

また無意識のうちに。

やっぱり僕は…

「なら巽はその彼女よりもお前を選んだ、ってことだな。ヒューヒュー！この色お・と・こ」

「えっ？」

「話してみると藍坂って面白い一面持つてんのか？明日一緒に食堂いってみねえ？」

今…梅原君は何て言った？

巽君が僕を選んだ？

このどうしようもない僕を？

「ん？なに驚いた顔してんだ？飯食つくらいいいだろ？あっ…ワリカんだからな？」

「そうじゃなくて…どうして巽君が僕を選んだって…」

梅原君はそれを聞いて頭を傾げた。

まるで何を言っているのか分からないかのように。

「そりやお前巽だって嫌な奴と毎日飯食うわけないだろ？あいつはお人好しだけど案外自分に正直な奴だからな。」

梅原君が笑顔でそう答えてくれた。

まるで僕という人間を認めてくれるように。

夕焼けが後光のように梅原君を照らし、その言葉に更に真実味をもちたらしめた。

「…そつか。」

僕はそれを聞いて小さく微笑んだ。

その笑いはけして明日のお昼ご飯が楽しみだからという訳ではなく、自分自身の愚かさに気付き嘲笑してしまった、というのが正しいだろう。

「あゝっ！？もうこんな時間じゃね〜か！？ガソガルが始まっちゃう！？」

「えっ？…えっ？？」

急に梅原君が腕時計を見ながら立ち上がったのを見て、つい勢いに任せて立ち上がったしまう。

「悪い、藍坂！俺は今から帰んなきゃなんない！また明日な！」

「あっ…うん。…またね。」

きっと僕の返事は走って帰って行った梅原君には届いてないだろう。

そうして僕は1人公園のベンチにもう一度座る。

そして話しのタイミングを折らないようにずっと2口目を付けてい

なかったジュースを、今度は自分のペースで飲み進めていく。

「…明日…約束しちゃった。」

僕は最後の一滴まで飲み干すように缶を倒し、空き缶を公園に設置された空き缶入れに捨て、自宅へとゆっくり歩き出した。

## 第8話

「おい、藍坂。ちょっと来いよ。」

……

「…うん、深沢君。」

……

「はい！藍坂の1人負け！罰としてジュースな！」

……

「うん…急いで買ってくるね。」

藍坂は自身の財布のみを持って自動販売機まで走っていった。

目を合わさないようにしていたが、話を聞いていただけでも藍坂がハメられたのだと理解できた。

しかし俺は…何も出来ず1人弁当を食うだけ。

—昨日から俺の昼飯事情はがらりと変わってしまった。

—昨日までは常に2人で昼飯を食べていた。

藍坂と2人で、場所は教室、食堂、屋上…はないか。

とにかく2人だった。

しかし現在俺は1人寂しく白米を弄くるように箸で突っついている。

一昨日まで一緒に食べていた相手：藍坂とは昨日の朝以来一言も話をしていない。

何度か話しかけようとしたのだが、それを行うだけの勇氣すら湧いてこないヘタレっぷりを不本意ながら披露してしまっていた。

ヘタレだと分かっているのに身体が動かない。

ヘタレだと分かっているから自分に苛々してくる。

それでもヘタレだから動き出すことが出来ない。

そんなヘタレ悪循環にどっぷりとハマってしまった俺はその場をやり過ぎしてしまうだけにとどまらず、学級委員やバイト、ましてや塚原先輩の家庭教師ですらやる気を無くしたかのような態度をとってしまった。

従ってやる気の欠片すら見いだせない俺に、善意で家庭教師を引き受けてくれている塚原先輩が説教するのも分かる。

塚原先輩は厳しくも受験生の現実、俺の学力の現状などを丁寧に教えつつ、さらには何かあったの？と優しく聞き手にもなってくれた。

そこで俺はぶちまけてしまった。

はるか先輩もいる中で、俺は普段感じることもない安心感を纏わせた塚原先輩に甘えてしまった。

そして藍坂の事を話したところで現在に至る。

「そっか…そんなことがあったんだね。」

「どうしてその…あいかわ君はヒロ君の事嫌っちゃったのかな？」

「…藍坂です、はるか先輩。…その理由はさっぱり。」

俺は既に勉強する気分ではなく、シャーペンを机の上に置きノートも閉じている。

机の上には俺がさっき淹れたお茶が人数分置いてあり、すでにすっかり冷めきってしまった。

それを淹れ直すと言ったら2人に座ってなさい！と怒られたため冷たいままなのだが、しょうがないと正座をすることにした。

「でも藍坂はそんなこと言うやつじゃないです…。それが良いところでもあり悪いところでもあったんで…。」

藍坂と話し始めてまだ一週間程度の俺が導き出す答えはいつも同じ。

藍坂が誰かに脅されて言わされた…それ以外は考えられなかった。

「それなら一度話し合ってみたらどうかかな？お互いがどう考えてるか分かるかも。」

「そうなんですけど…」

頭ではそう理解している。

ただ体が動かない。

本当に藍坂自身が拒絶したのではないか、という不安に縛られ動けない。

言葉に詰まった俺は温いとも言えなくなった。お茶を一気に流し込んだ。

「…それともやっぱ俺が近付かないのが一番なんですかね。」

俺は1人呟く。

藍坂に近付かないことに対して言い訳をするように…

そしてそれを正当化するかのように…

「俺って人を傷つけるのが得意なんですかね…藍坂に七咲…。それに…。だから藍坂も…」

「そんなことないわよ。第一七咲は…ってやるか？」

「…？はるか先輩？」

急に影を感じてふと顔を上げると、そこにははるか先輩が仁王立ちしていた。

あまりに堂々としたたち振る舞いだっただため、叱られるのではないかと首が引っ込みげんこつを受け入れるような体勢になる。

しかしいつまでたつても頭頂部に衝撃が来ないので、恐る恐るもう一度見上げる。

そこには優しく微笑みを浮かべる森島先輩がいた。

「は、はるか先ぱいつ!？」

弟でも見るかのような慈愛の瞳に天使の微笑み、そしてゆっくりと右手を振り上げると、ギュッと握りこぶしを作りそのこぶしを勢いよく振り落とした。

モデル体型のはるか先輩から正座している俺の頭に振り下ろされたこぶしは、位置エネルギーも関係してからか女性のものとは思えない強い衝撃が生まれた。

「はるか!？」

「…ヒロ君。ヒロ君はどうしたいの?」

「…えっ?」

勢いよく振り下ろした拳を解き、少し痛かったのか右手をぶらぶらと左右に振っているはるか先輩。

それでも痛がるような表情を欠片も見せず、笑顔は絶やさない。

「ヒロ君はあいかわ君ともう話したくないの? あいかわ君と仲良くしたくないの?」

「はるか先輩……」

「そうじゃないんでしょ？ヒロ君はあいかわ君が気になってしょうがないからそんなに落ち込んでるんでしょ？」

はるか先輩は叱るようではなく、諭すように柔らかな声色で言葉を落とす。

「ヒロ君は優しいから、すごく優しいからあいかわ君は絶対ヒロ君のこと大好きだったと思うの。」

「そんなこと…俺は……」

「だったらどうしてそんなに悩むの？ヒロ君は優しいよ。」

「それは……」

「少なくとも私はそう思ってるよ。だって私のこと助けてくれたもの。」

「そうね、巽君はすごく優しいと思うわ。」

「塚原先輩……」

スツと隙間を縫うように口を挿んでくる塚原先輩。

塚原先輩も口調はとても優しいもので、2人して心に沁み込むような声だった。

「どうするかは巽君の好きなようにしたらいいと思う。藍坂君の友

達なのは巽君なんだから。…でもやっぱり巽君は手を差し伸べる気がする。」

そういうと塚原先輩はテーブルの上に置かれていた筆箱やノートを片づけ、カバンを持ち上げる。

「今日はここまでにしようか。あとは巽君が考えることだと思う。」

「そうね、ひびきちゃん。それじゃあ帰ろっか。」

それに習うようにはるか先輩もカバンを肩にかけ、じゃあね〜とひらひらと手を振って玄関へと向かっていった。

ローファアを履き終え、玄関を開け出ていくはるか先輩と塚原先輩。

ドアを閉める直前、伸直りするまで帰ってきちゃ駄目だからね〜！とはるか先輩の声が聞こえたのだが、最後の方は言い終わる前にドアが閉まってしまったため、伸直りするまで帰ってきちゃだ…としか聞こえず、ボケた頭では解読するまで少し時間がかかった。

結局今日は全く勉強に身が入らず、2人が帰っても何もする気にならない。

藍坂はどうしたいんだ？

俺はどうしたいんだ？

俺は晩御飯を食べてないことも忘れたまま、明日の…藍坂への態度をどうすればいいか、を考えることに全神経を向けていた。

… けて金欠ゆえに食べなかつたわけではない。

翌朝、目覚ましにしては優しい音が鳴り響き目を覚ます。

カーテン越しに暖かな日の光を感じ、カーテンを開けるとそこには予想通りの晴天が広がっていた。

寝ぼけ眼のままキッチンへと向かい、冷たい水道水で顔を洗うとフライパンを火にかける。

今日作るのも超・もやし炒め？。

俺の自信作である超・もやし炒め？をパンの耳に挟んでそのまま頬張る。

… やっぱりめちやくちや美味い。

昨夜塚原先輩とはるか先輩が帰ってから、藍坂について考え続けた。足りない頭をフル回転させ、ひたすら熟考し続けた。

その結果… 俺は少し様子を見ることにした。

… もしかしたら藍坂が本当に嫌な思いをさせたのかもしれないし、

それがあつたのなら俺は見極めて直していきたく思っている。

…結局答えを先延ばしにただけかもしれない。

毎朝の習慣通り歯磨きをした後制服へと着替え、冷ましていた弁当を鞆の中につつまみ橘家へと向かった。

3年になってからすっかり減った橘家での朝食。

それでも一度寄ってから学校に向かうことは止めてない。

本当は止めようかと考えていたのだが、体が勝手にその時間に起きてしまうから仕方ない。

目覚ましの時間を変えてないだけだからかもしれないが…

「おらっ！起きろ…ってちゃんと起きてんのな。」

「もう怜に起こされるような時間に起きないよ。何されるかわかったもんじゃない…」

「偉い偉い、ようやく真人間になってきたな。あとは趣味の工口本集めを止めれば完璧だな。」

「僕の崇高な趣味にまで口出ししないでよ！」

「彼女いる奴がそんなもん趣味にしてんじゃねえ！…茶道部副部長として勉強しとけや。」

「それは…ハハッ。」

笑ってごまかす制服姿の純一。

最近はずっかり早起きが定着してきたので、俺が起こしに来た時には大抵着替えまで終えている。

お仕置きも2週間に一度くらいしかない。

春休み中まで起こしに来ていた甲斐はあったみたいだ。

「それじゃあ僕は先に行くよ。」

「へいよ。急に盛って学校サボんなよ。」

「そんな犬じゃないんだから…それじゃあ行ってきます。」

そしていつものように純一を見送ってから、俺は美也ちゃんとゆっくり学校へ向かう。

途中道端で黒猫を見つけた美也ちゃんを引っ張るようにならして歩いていたら、登校時間ギリギリに登校する羽目となった。

正直いつそのままサボってしまいたい…とも感じていたのだが、美也ちゃんがいる手前それは厳しいだろう。

「それじゃあタツツ〜！まったね〜！」

「美也ちゃん、今日は授業中寝ないようにな〜。」

「はっ…恥ずかしい事大声で叫ばないでよ！タツツ〜のバカッ！」

美也ちゃんは相変わらず無邪気で、話しているだけで心が少し落ち着く。

そんなだから、つい最近は何だって遊ぶことが増えてしまった。

今日も敢えて、昨日の授業中に居眠りしてそれが原因で廊下に立たされたことを、人前で言ったりしてしまった。

顔を真っ赤にして俺をにらむ美也ちゃん。

そんな美也ちゃんを周りの生徒は、微笑ましいものを見るかのように笑みを浮かべて、一部始終を眺めている。

誰彼構わず、周囲から妹のように可愛がられる天性のスキルでも身につけているのではないかと俺は皮肉混じりに考えていた。

誰からも好かれる…

それがこんなにも難しく、こんなにも思い悩むとは思わなかった。

親父も会社の同僚に裏切られて、尻拭いのために辞めさせられた。

俺の尊敬する人ですら出来なかった現実が、今は俺に重くのしかかる。

美也ちゃんと別れ、自分の教室まであと数歩…

見慣れたクラスメートがそこにはいて…

そしてそこには藍坂もいる。

それを意識した途端、またも足取りが重くなった。

「…とりあえず様子をみよう。」

今朝だした答えを再度確認するように口にし、大きく一步踏み出す…

「ふざけんじやないわよ！」

そんな時だった。

自分の教室から大きな怒鳴り声が聞こえたのは…

「…はい？」

突然聞こえた怒鳴り声に困惑する俺だが、続けて聞こえてきた机が激しく倒れる音で現実に引き戻される。

(とにかく中の様子を…)

さっきまでの重い足取りが嘘のように、教室に駆け込む。

3年生にもなり4階になった教室の窓からは、山の上に校舎が立っている事もあり爽快な景色が見え、今日のような晴れている日には誰しもが気分をスッキリさせることが出来る景色なのだが…

その景色を見下ろせる窓際の席に、俺は教室に入ってから直ぐに目が向いた。

激昂してクラスメートの平野に食ってかかる薫。

そんな薫に負けず劣らず苛ついた表情を浮かべる平野。

…そして平野の後ろには、藍坂が悲しげな目で今教室に入ってきたばかりの俺を見る藍坂の姿があった。

明るいはずの教室に、どす黒く重たい雰囲気。

どうやら今日は普通の朝ではないらしい。

…神様は俺に何をさせたいんだ、ちくしょう。

## 第8話（後書き）

長い間お待たせしてすみませんでした！

次も遅くなりそうですが、もしよろしければ少々お待ちください！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0339q/>

---

アマガミ の見つけた景色

2011年6月30日18時07分発行